

幼児保育学科新入生の意識調査報告 2011

松尾 智則・久松 薫・久原 広幸

A Report on the Survey of Entrant's Attitude Toward Division of Early Childhood Care and Education (2011)

Tomonori Matsuo・Kaoru Hisamatsu・Hiroyuki Kubara

はじめに

本研究は平成 21 年度から開始した幼児保育学科 1 年生の継続的意識調査の平成 23 年度版報告である。平成 23 年は入学者数にほぼ変動はないが、平成 22 年度からの新試験制度の 2 年目であり、平成 21 年度と比較して一般入試による入学者の削減と指定校制度の本格導入による推薦入試による入学者の増加が行われている。今回は前回の報告「幼児保育学科新入生意識調査報告（中村学園大学研究紀要 43 号）で明らかになった特徴点を中心に平成 23 年度入学者の実態明らかにし、今後の学生指導の基礎資料とする事を目的としている。

1. 研究方法

本調査の対象は平成 23 年度幼児保育学科新入学生 213 名である。調査は質問紙法により 1 年間で 4 回（4 月上旬、7 月下旬、9 月下旬、1 月下旬）に実施した。有効回収数はそれぞれ、第 1 回 211 件（99.0%）、第 2 回 210 件（98.6%）、第 3 回 187 件（88.0%）、第 4 回 211 件（99.0%）であった。

2. 学生の属性

第 1 回目のアンケートのフェースシートの部分から回答学生の特性を捉えると以下の通りである。

(1)性別の特徴

幼児保育学科は、幼保系の短期大学であるために例年その大部分が女子学生であり、特に平成 23 年度入学生では女子が 98.6%を占めている。

(2)新入生の出身高校の特徴（表 1、表 2）

中村学園大学短期大学部は九州の中核都市

表 1 出身高校

	推薦入試	一般入試	計
福岡市内公立	23	8	31
福岡県下公立	46	10	56
福岡県外公立	66	9	75
福岡市内私立	5	3	8
福岡県下私立	13	0	13
福岡県外私立	7	1	8
併設校	15	0	15
計	175	31	211

幼児保育学科アンケート(1)問 5
総計は無効回答を含む

表 2 出身高校科

	普通科	商業系	農業・工業系	情報・国際系	総合系	その他	無回答	計
推薦入試	135	11	2	3	12	12	0	175
一般入試	31	0	0	0	0	0	0	31
計	166	11	2	3	12	12	0	211

幼児保育学科アンケート(1)問 6
総計は無効回答を含む

である福岡市都心部に所在するためもあり福岡県外の高等学校卒業者が40.8%を占めている。九州各県等広域の高等学校から学生が入学してきていることが特徴であるが、更に近年少しづつその比率は上昇しており、地元密着型という一般的な短期大学の傾向とはズレがある。また、福岡県内で見ても、福岡県内においても福岡市は北西部に位置し、東に北九州市、南に久留米市という拠点都市があり、その近辺には多くの大学・短期大学が設置されているにもかかわらず福岡市を除く福岡県（以後福岡県下とする）出身者が約33.6%を占めており福岡市内の高校出身者は25.7%にとどまっている。

設置者別で、私立の併設高校を抱えているにもかかわらず、公立高校卒業生が79.1%となっており微増傾向にある。

さらに、高等学校で在籍していた科についても、79.6%の入学生が普通科出身で試験入試に限ると100%に上っている。また、次いで多いのは総合系と商業系の科の卒業生である。普通科と総合・国際系の科を合計すると85.8%（同93.0%）に上っており、幼児保育学科の学生の高校時代の学習傾向とし

表3 現住所

	福岡市内	福岡県下	福岡県外	計
推薦入試	97	59	19	175
一般入試	21	9	1	31
計	118	68	20	

幼児保育学科アンケート(1)問2
総計は無効回答を含む

表4 居住形態

	家族と同居	一人暮らし	学生寮	その他	計
推薦入試	106	45	21	1	173
一般入試	23	4	4	0	31
計	129	49	25	1	211

幼児保育学科アンケート(1)問3
総計は無効回答4を含む

ては普通科教育中心であるといえる。

(3)入学後の居住状況（表3、表4）

入学後の住所については遠隔地の学生は当然自宅から通えないため、県外生が高校所在地と比べると当然低下するが依然として10.0%あり、県下生では33.2%で、多くの学生が勉学に制限のかかる遠距離通学をしている状況が窺える。このことは、家族との同居率62.1%が前述の市内高校生率25.79%、県外現住所学生率10.0%、県下高校生率33.6%の合計とほぼ近い値となっていることから裏付けられる。

(4)受験に当たっての意識と状況（表5、表6）

専願制の推薦入試制度による入学者が全入学者の82.9%を占めているので、幼児保育学科を第一希望とする比率が87.2%の高率になることは制度上当然である。しかし、推薦入試による入学者の中にも率直に中村学園大学教育学部その他を第一希望に挙げている学生（2.9%）がいることから考えるとこの結果は建前でなく学生の素直

表5 第一希望進路

	推薦入試	一般入試	計
幼児保育学科	170	9	179
教育学部	3	11	14
中村学園大学・短期大学部の他の学科	1	0	1
福岡県内の他の小幼保系4年制大学	0	9	9
福岡県内の他の小幼保系短期大学	0	0	0
福岡県外の他の小幼保系4年制大学	0	0	0
福岡県外の他の小幼保系短期大学	0	0	0
他の小幼保系以外の4年制大学	0	2	2
他の小幼保系以外の短期大学	0	0	0
その他	1	0	1
計	175	31	211

幼児保育学科アンケート(1)問7
総計は無効回答を含む

表6 受験の理由

複数回答

	推薦入試指定等	推薦入試公募	一般入試	計
親・親戚・知人のすすめ	33	35	10	78
高校や塾などの先生のすすめ	27	19	9	55
高校や中学の先輩のすすめ	16	10	2	28
幼稚園教諭・保育士になりたかったから	85	74	25	184
おもしろそうだったから	6	5	5	16
合格できそうだったから	1	1	4	6
近いから	7	6	9	22
都会にあるから	2	7	2	11
就職が良いから	60	64	20	144
免許・資格が取れるから	47	46	17	110
出前講義やオープンキャンパスをみて	38	33	7	78
まだ就職したくなかったから	1	0	1	2
ホームページやパンフレットをみて	31	20	11	62
その他	2	2	2	6

幼児保育学科アンケート(1)問8

な意識を表していると考えられるのではないかとと思われる。一方、試験入試においてが幼児保育学科を第一希望としている学生は29.0%で平成21年度の43.8%から見ると大幅に減少し、替わって増加したのは中村学園大学教育学部や他の4年制大学を第一希望とした者である。

受験の理由についても、「幼稚園教諭・保育士になりたかったから（出現率89.1%）」、「就職がいいから（70.1%）」、「免許・資格が取れるから（53.1%）」が前回報告と同様に突出している。反対に「まだ就職したくなかったから（1.0%）」、「都会にあるから（5.2%）」、「合格できそうだから（2.8%）」などの理由も前回報告同様にきわめて低いことが分かる。従って、幼児保育学科においては専門教育の内容に興味を持ちづらい不本意入学の学生は著しく少ない傾向に変動はないことが想定できる。

以上、新入生の高校時代の状況と意識を見てきたが、次に入学後の意識とその推移を示す。

3. 学生の意識の推移

調査は定点観測的に複数回同一項目について取っているものとその時期にふさわしい項目を選択して調査している項目がある。そこで、まず定点観測的な内容2項目についてその実態と変化について明らかにする。

(1)希望進路の推移（表7）

入学当初の4月、前期終了時の7月末、9月の後期開始後（保育所実習内諾のための訪問終了）、後期終了時の1月（前期幼稚園実習内諾のための訪問終了）の4回のアンケートの結果を見ると学習の進展、各種体験の増加にもかかわらず全体的には入学当初から大幅な変化は見られない。幼稚園志望と保育園志望は交互に相互補完的に変動しており、これに少数の施設保育士希望者を合算すると80%台後半から90%台で推移している。これに次ぐのは大学編入であるが、本調査を補足するデータとして幼児保育学科卒業生で4年制大学への編入者は実際にも少なく、10名も達しないのが通例であり、編入先も中村学園大学人間発達学部幼児発達専攻がそのほとんどを占めており、他の四年制大学や他の

専門分野への編入希望者はほとんどいないという特殊な傾向がある。

(2)能力に関する意識の推移 (表8)

各学期の授業終了時の平成23年7月と平成24年1月に各種の能力修得についての自己評価を「とても成長した」「少し成長した」「余り成長していない」の3区分法で調査した構成数とそれぞれに3点から1点の係数を掛けて加重平均値を出したものが表8である。なお、7月の比較の基準は前学期間の成長で、一月の比較の基準は一年間の成長とした。

表7 希望進路の推移 構成比%

	4月	7月	9月	1月
幼稚園	39.3	42.9	41.7	47.4
保育園	44.4	47.1	44.9	37.4
施設	2.4	5.2	3.7	1.9
一般企業	1.4	0.0	0.0	0.5
大学編入	1.9	1.9	5.3	3.8
専門学校	0.0	0.0	0.0	0.5
未定・無回答	10.6	2.9	4.4	8.5

幼児保育学科アンケート (1～5) 問10

これによると前学期末時点で得点が高い分野は「ピアノのや声楽などの音楽技術・知識 (2.46)」「乳幼児の体や成長に関する保健・栄養技術・知識 (2.39)」で前回の「乳幼児の体や成長に関する保健・栄養の技術・知識 (2.476)」や「幼稚園・保育園・施設に関する制度的知識 (2.414)」で前回調査とは入れ替わっている。一方得点が低い分野は前回同様に「文章力・読解力」(1.94)や「体力や運動能力など体育技術・知識」(1.90)である。体育技術・知識に関しては体育の専門教育開始前であり学生の不安感に制度的に仕方がない面がある。次に、各学期終了時点での得点を比較して+ポイントになっているものは10分野に上っており、前回調査の3分野から大幅に増加しており、入学前の指導や初年時期養育の充実と各授業の改善の成果であると考えたい。更に前回調査と1月末での各分野のポイントの差を集計すると11分野中7分野がプラスとなっている。低下している分野も最低で-0.03ポイントにとどまっている。特に最大の増加を示している分

表8 能力に関する意識の推移

	とても成長した		少し成長した		あまり成長していない		係数化			係数化 (前回値)		
	7月	1月	7月	1月	7月	1月	7月	1月	1月-7月	7月	1月	1月-7月
ピアノのや声楽などの音楽技術・知識	97	104	113	105	0	2	2.46	2.48	0.02	2.35	2.33	-0.02
製作やデザインなどの美術技術・知識	32	46	159	140	19	19	2.06	2.13	0.07	2.20	2.11	-0.09
体力や運動能力など体育技術・知識	17	27	156	142	37	42	1.90	1.93	0.02	1.92	1.79	-0.13
文章力・読解力	15	26	167	149	28	35	1.94	1.96	0.02	1.90	1.81	-0.08
その他の一般教養・知識	44	68	152	124	14	19	2.14	2.23	0.09	2.03	2.01	-0.02
マナー、社会性、コミュニケーション能力	74	105	132	105	4	1	2.33	2.49	0.16	2.27	2.25	-0.02
乳幼児の体や成長に関する保健・栄養技術・知識	84	96	123	115	3	0	2.39	2.45	0.07	2.48	2.48	0.00
幼稚園・保育所・施設に関する制度的知識	66	90	141	119	2	2	2.31	2.42	0.11	2.41	2.44	0.03
保育に関する理論的知識	44	69	155	131	11	11	2.16	2.27	0.12	2.33	2.30	-0.04
保育に関する実践的技術・知識	43	68	149	137	18	6	2.12	2.29	0.17	2.23	2.31	0.07
コンピュータ等の利用に関する知識・技術	43	26	142	136	25	49	2.09	1.89	-0.19	2.07	1.83	-0.25

幼児保育学科アンケート (3、5) 問11

野は「マナー、社会性、コミュニケーション能力 (0.25)」で新たに導入した『短期大学部学園マナー』教育の成果が出ているのではないかと考えられる。

(3)入学時の不安

新生活の開始に当たって意識した不安や悩みを勉学・生活・進路の3分野に分けて自由記述で調査した結果を整理した。記載の出現率を不安の高さと考えると3分野共に前回報告と比べて大幅に低下した。これは入学前指導、初年時教育や各種オリエンテーションの充実の成果であると考えられる。「勉学上の不安・不満」20.9 (前回報告 69.5%) で最も高く、ついで、「進路の不安・不満」が 17.1% (同 51.6%)、「生活の不安・不満」が 9.0% (同 31.0%) となっている。これもまた、入学前指導、初年時教育や各種オリエンテーションの充実の成果であると考えられる。また、「生活の不安・不満」は入試区分による差が余り見られないが、「勉学上の不安・不満」は推薦入試区分の学生が試験入試学生より 2.6 ポイント (前回報告 10.3 ポイント) 高く、逆に「進路の不安・不満」は試験入試区分の方が 13.6 ポイント (同 11.3 ポイント) 高くなっていることは興味深い。さらに、前回報告と比べて出現率は大幅に低

下しているが、以下示しているように出現項目の特徴は類似していることがあげられる。

①勉学上の不安・不満 (表 9)

全体として出現率は大幅に低下している。その中で多いものは前回と共通していた。順に「ピアノ・声楽」14 件 (出現率 6.6% (前回報告 11.7%))、授業についていけるか」12 件 (出現率 5.7% (同 18.3%))、試験・レポート・論文」11 件 (出現率 5.2% (同 38.0%)) となっており、少なくなったとは言っても大学特有の学習形態や幼保系に特有の「ピアノ・声楽」に戸惑いを感じている学生の姿が伺える。これに対応するためには初年次教育や高大連携による高大接続を一層充実しなくてはならないと思われる。

②生活上の不安 (表 10)

前述の入学後の居住形態で触れた様に自宅学生が多いためか、全体としては出現率は低い。また、「勉学上の不安・不満」と比較すると突出した項目もない。その中で比較的多いものは、「通学」5 件 (出現率 2.4% (前回報告 6.1%))、「学生生活」4 件 (出現率 1.9% (同 4.7%))、「一人暮らし」3 件 (出現率 1.4% (同 6.5%)) で県外生と県下生が比較的多いことを反映した内容が多くなっている。

表 9 勉学上の不安・不満

自由記述の整理・複数回答

	推薦入試	一般入試	計
授業について行けるか	9	3	12
ピアノ・声楽	12	2	14
試験・レポート・論文	10	1	11
補講	1	0	1
ノートの取り方	2	0	2
勉強の仕方	2	0	2
自分の適性	1	0	1
提出物	1	0	1
自由記述なし			167

幼児保育学科アンケート(1)問 11

表 10 生活上の不安・不満

	推薦入試	一般入試	計
一人暮らし	3		3
体調管理	1		1
学校生活	3	1	4
アルバイト	2		2
通学	4	1	5
金銭面	2		2
自分の時間がない	1		1
サークル		1	1
自由記述なし			191

幼児保育学科アンケート(1)問 12

③進路の不安・不満 (表 11)

「進路の不安・不満」の約半数の半数の 18 件 (出現率 8.5% (前回報告 25.8%)) は「就職できるか」といった漠然としたものであり、「自分に合っているか」1 件 (出現率 0.5%)、「自分が先生になれるのか」2 件 (出現率 0.9%) と併せて、入学当初と言うこともあり、具体的悩みとなっているものは少ない。意識しやすい項目としては「就職場所 (福岡か地元)」3 件 (出現率 1.4%)、「就職種類 (幼稚園か保育所か)」3 件 (出現率 1.4%)、が目立っている。ただし、一般入試による入学者に限ると記載の半分は「編入できるか」4 件出現率 12.9%) で突出しており、これは前述の『受験に当たっての意識と状況』で触れた一般入試による入学者の特性と連動した新しい動きと見るができる。

表 11 進路の不安・不満

自由記述の整理・複数回答

	推薦入試	一般入試	計
就職場所 (福岡か地元)	3	0	3
編入できるか	0	4	4
就職できるか	15	3	18
就職活動について	1	1	2
自分が先生になれるか	2	0	2
公務員幼稚園教諭・保育士の採用	1	0	1
幼稚園か保育園か	2	1	3
企業系の就職	1	0	1
自分に合っているか	1	0	1
保育者制度の将来	1	0	1
自由記述なし			175

幼児保育学科アンケート(1)問 13

(4)進学先の修正 (表 12)

幼児保育学科での 1 年間の学校生活を踏まえて、もし高校生に戻れるなら進路選択をどうするかを設問として設定すると、再度「幼児保育学科」を進路として選択する者は 54.5% で、過半数を占めており、「幼保系その他の短期大学」を選ぶ者の 5.7% と比較しての短期大学の中での優位性は明らかであった。しかし、「教育学部その他の 4 年制大学」を選択する者が 37.9% I に上っていることは注目に値する。さらに、入試区分別に見ても、教育学部等の 4 年制大学と併願している者が多いことが既に明らかになっている。一般入試合格者の 74.2% みならず、専願を前提とする推薦入試合格者の 28.6% が 4 年制大学に目が向いていることを考えると幼児保育学科卒業生の進路指導として 4 年制大学編入指導を充実させる必要性が浮かんでくる。

(5)保育所実習への不安と楽しみ (表 13)

幼児保育学科学生にとって最初のハードル

表 12 進路の修正

	推薦	一般	計
幼児保育学科	108	7	115
他の幼保系短大	5	0	5
幼保系以外の短大	6	1	7
教育学部	30	8	38
他の幼保系 4 大	9	6	15
幼保系以外の 4 大	11	9	20
就職	4	0	4
その他	2	0	2

幼児保育学科アンケート(5)問 11

表 13 保育所実習への不安と楽しみ

		とても楽しみ				計
		そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	無回答	
とても不安	そう思う	63	68	4	8	143
	どちらともいえない	14	50	0	1	65
	そう思わない	1	2	0	0	3
	計	78	120	4	9	211

幼児保育学科アンケート(5)問 13

である保育所実習を直前に控えた1月に保育所実習への意識を「不安」「楽しみ」という軸によって整理すると、全体では「(とても不安) と思う」が143件(構成比67.8%(前回報告69.7%))で「(とても楽しみ) と思う」の78件(構成比37.0%(同29.3%))を圧倒しているが、両指標をクロスさせると『「(とても不安) と思う」・「(とても楽しみ) どちらとも言えない」68件(構成比32.2%(同31.3%))』が最も多く、次は『「(とても不安) と思う」・「(とても楽しみ) と思う」63件(構成比29.9%(同23.2%))』である。また、『「(とても不安) どちらとも言えない」・「(とても楽しみ) どちらとも言えない」50件(構成比23.7%(同21.23%))』がその次を占めている。また、『「(とても不安) と思う」・「(とても楽しみ) と思う」』は4件(構成比1.9%(同5.1%))に過ぎないという複雑な感情を構成している。更に、全体としては前回の報告と比較して不安感は微減、楽しみ感は増加している。根拠のない自信は禁物であるが不安感の一定の低減は保育実習に於いて好ましい効果を出すのではないかと期待される。

4. おわりに

今回の報告で明らかになった点は以下の通りであった。

- (1) 幼児保育学科へ入学してくる高校生の出身高校は県下・県外の比率をじわじわと上げており、そのことが学生の不安や悩みの背景となっている。
- (2) 普通科系の高校出身者が大多数であるために逆に専門教育の経験が新鮮で魅力的である。
- (3) 受験に当たっての幼児保育学科の選好度は高いが、4大指向意識の進展が一般入試による入学者のみならず推薦入試合格者の中にも上昇してきているので今後卒業後の進路対策として専門職就職以外に4大編入のサポー

ト体制を構築する必要性が生じている。

(4) 受験生の専門指向・職業指向は依然として高い。

(5) 学生の能力の自己評価に関しては改善の傾向が見られる。

(6) 入学時の、勉学・生活・進路に関する不安は低減しているが、表出する項目に大きな変化はない。

(7) 初めての学外実習に対する保育所実習に関する意識にも大きな変化はないが、若干の不安感の低減と期待感(楽しみ)の増加が見られる。

今回、高大連携による入学前の教育及び初年次教育の改善のための基礎資料を得るために行った継続的なアンケート調査の2回目の整理、報告を行った。第1回目とほぼ同様であった部分もあるが、その後の感覚的に感じていた変化などを数値上で明らかにできたり、思いもかけない示唆を得ることができた。今後のこの知見を教育課程内外での学生指導に生かしていきたい。

参考文献

幼児保育学科新入生意識調査 松尾 智則 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要第43号 平成23年3月 PP.105-114